

南極OB会 会報

No. 5

発行 南極OB会
会長 川口貞男
編集 広報委員会

目 次

表紙写真 オーロラオーストラリス・・・1	連載 支部便り④（秋田支部）・・・8
第50次日本南極地域観測隊の動向・・・2	連載 「時は巡り」③・・・10
南極OB会総会および 第50次隊壮行会開催・・・3	タロジロ再会時の疑問（前編）
南極観測の歴史を残す資料集め・・・3	連載 「海水奮戦」②・・・11
ーアーカイブ委員会の活動開始ー 私と宗谷・・・11	私と南極の空・・・12
南極関連情報・・・4	連載 「昭和基地はいま」②・・・14
第3次越冬隊の記録 ノルウェイ・米国合同トランスでの経験	会員の広場・・・15
鳥居鉄也さんご逝去・・・5	受賞、訃報
鳥居鉄也博士のご逝去を悼む・・・6	広報委員会からのお知らせ・・・16
村山雅美さんを偲ぶ（下）・・・7	
偉大な極地プロデューサー	



写真．モーソン基地の入江に停泊中の「オーロラ オーストラリス」。第50次隊が乗船する。

第 50 次日本南極地域観測隊の動向

小達恒夫

(第 50 次日本南極地域観測隊 観測隊長兼夏隊長)

皆さまご存知の通り、南極観測船「しらせ」は、昨年出発した第 49 次観測を最後に退役しました。一方、次期南極観測船、新「しらせ」は、2009 年度の第 51 次観測から就航する予定で、建造が進められているところです。これまで昭和基地への観測隊員の派遣及び物資・燃料補給は、南極観測船「宗谷」、「ふじ」、「しらせ」によって実施されてきましたが、今年度出発する第 50 次隊は、我が国独自の南極観測船を持たないという日本南極地域観測事業始まって以来の非常事態となったわけです。南極 OB・OG の皆様におかれましては、大変気を揉んでいたことと思います。第 50 次隊の状況を説明する機会が遅れましたことをお詫び申し上げます。

2008 年度の観測船運航の空白期間に対応するため南極観測統合推進本部（以下、南極本部）は、物資の事前輸送を行うとともに、観測隊員を代替輸送手段によって派遣し、南極観測を継続することを基本方針として対応することとしました。また、南極本部の下に置かれた南極輸送問題調査会議においては、代替輸送手段について、様々な角度から検討を行った結果、安全性、確実性等の理由から、オーストラリア南極観測隊が用いている「オーロラ オーストラリス」（表紙写真）を利用することが最適と判断しました。これを受け、南極本部総会（2007 年 6 月）で、第 50 次観測は、日本－オーストラリア共同観測を含めた「オーロラ オーストラリス」による代替輸送とする方針を決定しました。幸いなことにオーストラリア政府も日本の申し出を受け入れ、第 50 次隊では「オーロラ オーストラリス」を活用することになったわけです。

ところで、第 27 次観測（1985 年 12 月）では、オーストラリア政府の要請を受け、「しらせ」が、密氷群中にビセットされたオーストラリアの観測船「ネラ ダン」を救助しています。また、第 40 次観測（1998 年 12 月）では、氷海においてプロペラの故障

が発生し、自力で動くことができない「オーロラ オーストラリス」を救出したこともありました。今回、オーストラリア政府が日本の申し出を受け入れた背景には、こうした「しらせ」及び南極 OB・OG の皆様の活躍があったからと思われます。いずれにせよ、日本南極観測事業の非常事態に救いの手を差し伸べてくれたオーストラリア政府及び国民に深く感謝する次第であります。

ともかく第 50 次観測では「オーロラ オーストラリス」を活用することにより、故村山先生が危惧された南極観測の中断という最悪のケースは避けることが出来そうです。しかしながら、「オーロラ オーストラリス」の砕氷能力は「ふじ」と同等、あるいはそれ以下ともいわれており、「しらせ」で実施している昭和基地接岸による物資の氷上輸送は到底見込めません。また、同船はオーストラリア南極観測隊の人員・物資輸送も行っていることから、昭和基地方面での行動期間も制限されています。

現在の計画では、2008 年 12 月 30 日西オーストラリア州フリマントルを出港後、海洋観測を実施しつつ約 2 週間の航海で、1 月 15 日前後に昭和基地沖合いの定着氷縁に到達する予定です。空輸拠点は、昭和基地の北方、約 50 マイル圏内を想定しています。昭和基地沖合での滞在期間は、2 週間程度を予定しており、この間に食料を中心とした第 50 次越冬隊用の物資を昭和基地へ輸送するとともに、若干の夏作業及び各種引継ぎを実施した後、第 49 次越冬隊員の収容を行う予定です。1 月末には昭和基地沖の氷海を離脱し、海洋観測を実施しつつ 2 月 21 日まではタスマニア州ホバートへ帰港する計画であります。

我々第 50 次観測隊は、これまでの多くの南極 OB・OG の皆様の努力を受け継ぎ、着実に観測を積み重ね、新「しらせ」就航時代を迎えられるよう全力を尽くす所存です。しか

しながら計画の実施は、南極という厳しい現場の天候、海氷状況等に大きく依存します。皆様方におかれましては、我々の実力が充分

発揮できるよう、現場の天候に恵まれることを祈っていただければ幸いです

南極OB会総会および第50次隊壮行会開催 11月27日、湯島のホテルで ——ご出席をお待ちしています——

2008年度南極OB会総会と第50次南極観測隊壮行会は、11月27日（木）午後6時から東京・文京区湯島1-7-5の東京ガーデンパレス（TEL 03-3813-6211）で開催される。会費は10,000円です（ご案内文と出欠連絡要領などを同封しましたので参考にしてください）

南極OB会総会は、川口OB会会長の開会の挨拶に続いて

- ① 運営委員長の一般報告
- ② 会計報告と監査報告
- ③ 広報委員会報告

④ アーカイブ委員会報告

⑤ 南極教室関係報告
などの各種報告が行われる。

また一部委員長や委員などの交代の承認が予定されている。

一旦休憩の後第50次南極地域観測隊の壮行会が行われる。

OB会長の激励の辞の後来賓挨拶があり、乾杯、懇談に入る。その中で支部長挨拶を受けた後、隊長、越冬隊長の決意表明や隊員紹介が行われ、祝電などが披露される。

南極観測の歴史を残す資料集め

～アーカイブ委員会の活動開始～

南極観測を行っている諸外国には南極・北極に関する博物館や資料館があり、探検時代からの資料などが保管され、展示されている。わが国の国立極地研究所は、いま立川移転を進めており、移転後の極地研には資料館の構想がある。

南極OB会ではそのつながりを活用し、会員各位から提供して頂ける貴重な資料を収集・整理して極地研の資料館に移管しようと、南極観測の歴史資料を残す手伝いをするアーカイブ委員会を立ち上げた。

受け入れ資料は

- (1) 南極観測事業全般に係わる資料
- (2) 各次隊の公用資料・隊内資料および私

的資料

- ① 記録資料（メモ、資料、文献、音声テープなど）
- ② 映像資料（写真、ネガ、スライド、映画フィルム、DVDなど）
- ③ 現物小物資料

とする。提供資料の受け入れに関する基本方針は

- (1) 資料の提供に係わる経費は、原則として提供者の負担とする。
- (2) 提供を受けた資料の所有権はアーカイブ委員会に属し、重複資料の場合を含み不要と判断した資料の廃棄はアーカイブ委員会に一任されるものと

- する。原則として提供者に返還しない。
- (2) アーカイブ資料は目録を作成し、その台帳はOB会員に対して公開される。
 - (3) アーカイブ資料は原則として一般へ非公開とするが、必要とされる閲覧はアーカイブ委員会の許可を要する。
 - (4) アーカイブ資料に基づく二次資料の作成は、アーカイブ委員会の許可を要し、作成した資料はアーカイブ資料として保存する。二次資料の著作権は、原則としてアーカイブ委員会に属する。

とする。なお、この基本的な方針は、適宜見直していくこととする。

提供資料およびアーカイブ資料の保管と整理作業の場として(株)アイ・エス・エス(ISS) 鬼高センター(市川市鬼高)の文書保存サービスを利用する。資料はISSの規格ダンボールに収め、箱に付けたOB会資料番号とISS管理番号によって管理・保管

する。また資料の取捨整理作業はISSの会議室を借用して使用する。

10月初めに南極OB会初代会長の村山資料の一部(大半はすでに極地研で保存)を夫人から寄贈を受け、ISS鬼高センターに移送して最初の保存資料となった。11月から月1回ほど作業チームが集まって、取捨整理や目録の作成に当たることとしている。

アーカイブ委員会としては、今後、各大学や研究所の図書室や研究室に保管されている重要な資料について、所在情報の収集も行いたい。各次隊の資料収集とともに、この所在情報の収集にも会員各位のご協力をいただきたい。

この件に関するご連絡やお問い合わせは、郵便、OB会メール、Faxなどで事務局アーカイブ委員会宛にお送りください。なお、ご連絡に関する対応はほぼ週一回(主として金曜日)になりますことをご了承ください。

(アーカイブ委員会会長 小野延雄 記)

南極関連情報

第3次越冬隊の記録出版

第3次越冬隊(村山雅美隊長)の若井登さん、小口高さんが中心になって、およそ10年かけて同隊の記録「14人と5匹の越冬隊1年遅れの本観測 南極観測第3次越冬隊」をまとめ、自費出版した。

第3次隊は、本観測隊とされた第2次が悪氷状に阻まれて越冬に失敗した後、「宗谷」をヘリ空母に改装して空輸方式に切り替えて、日本隊としては1次に次ぐ2度目の越冬隊であった。樺太犬タロ、ジロが無人の昭和基地で1年間生存していたのを発見という明るいニュースでスタートしたが、輸送量が60トン未満という厳しい生活を強いられた。しかしオーロラ、地磁気、重力、電離層、人工地震による氷厚測定、気象など地球物理観測の起点を築いた隊である。

1次で犬係りをした北村泰一さんが3次で

も参加し、タロ、ジロと再会したときの話はこれまで伝えられたものとは違って、緊迫感がある。5匹の犬というのは、タロ、ジロのほかに、3次隊がひそかに連れて行った子犬アク、トチ、ミヤのこと。犬をめぐる話も面白い。写真がふんだんに入っている。半世紀前の初期の観測隊の貴重な記録になっている。

自費出版のため、注文は編集者の若井登さんまたは小口高さんへ直接申込んでください。

若井さんは Fax : 042-383-2823

Eメール wakai.noboru@nifty.com

小口さんは Fax : 03-3996-6091

Eメール oguti-takasi@pc5.so-net.ne.jp

価格は、送料・税込みで 2500 円 です。

申し込むと本と同封されて振替用紙が届きますので、代金はその振り替え用紙にてお支払いください。

鳥居鉄也さんご逝去

(1, 2 次夏隊、4, 8 次越冬隊長)

(財) 日本極地研究振興会理事長



ドライバレー・ライト谷のキャンプ地で

鳥居鉄也さんは、10月16日午後0時10分心不全のため東京・練馬区の病院で死



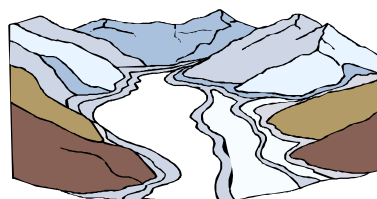
去された。90歳だった。お通夜は20日午後6時から、告別式は21日午前10時から、杉並区梅里1-2-27、堀ノ内斎場で行われ、南極関係者多数が参列した。喪主は矩子（のりこ）夫人。葬儀委員長は(財)日本極地研究振興会常務理事吉田栄夫氏、弔辞は平山善吉、星合孝男両氏が捧げた。

鳥居さんは静岡県出身。1918年5月台湾・高雄市で生まれた。旧制八高（名古屋）から東京帝国大学理学部化学科卒。戦時中は海軍技術将校として山口県徳山の第三海軍燃料廠に勤務した。千葉大学教授、千葉工業大学教授。地球化学専攻、理学博士。(財)日本極地研旧振興会を設立、3代目の理事長であった。

八高山岳部から東大山の会に。南極には第1次から参加。2度の越冬隊長を勤めた。また20数年にわたりマクマード・ドライバレー（南極オアシス）の調査研究に当たり、1965年南極石（アンタークティサイト）を発見している。

4次隊での活動の中には、昭和基地南西の山群（後「やまと山脈」と命名）の最高峰（後「福島岳」と命名）に隊員2名が登頂に成功がある。また8次隊では、次の9次隊の極点旅行をサポートするため新大型雪上車の性能テストや燃料デポ、コース踏査などを目的として、南緯79度15分の米ブラトー基地に到達している。（深瀬記）

なお、掲載した鳥居さんのお写真は、次の記事の写真とともに先生の御著書「南極とともに」から抜粋使用させていただきました。



鳥居鉄也博士のご逝去を悼む

吉田栄夫

第1次、第2次観測隊員、第4次副隊長兼越冬隊長、第8次観測隊長兼越冬隊長であられた鳥居鉄也博士は、2008年10月16日午後0時10分、入院加療中であった順天堂大学医学部附属練馬病院で、病勢俄に改まり急逝された。享年90歳であった。

昨2007年7月、岩波書店から私家版として上梓された「南極とともに ―地球化学者として―」には、その人生を傾注された「南極」との関わりが、余すところなく記されている。国家事業としての我が国の南極観測発足の頃、東大山の会の面々、とくにその僚友村山雅美、朝比奈菊雄らを糾合して、観測の実施、推進に力を尽くした。第1次、第2次で、いわゆる足軽組の頭領として、設営・総務を担当したが、地球化学研究者として菅原健、三宅泰雄博士らの支援のもと、昭和基地周辺の湖沼水や、先駆的研究ともいえる海水中の炭酸の船上観測などに取り組み、南極観測の中に地球化学分野を取り込むのに尽力した。

旧制八高から山岳部に加わった登山家として、第4次越冬では、自らトラバース隊を率いて人跡未踏のやまと山脈調査、第8次越冬では第9次隊極点旅行のための、プラトー基地までのルート開設トラバース隊を率いた。

他方、昭和基地閉鎖中の1963年、永田武博士のサポートもあって、全米科学財団（NSF）極地局の当時の局長トム・ジョーンズ博士の援助を取り付け、鳥居博士はまず東大山岳部の仲間であると同時に化学者である山縣登、長連英両博士とともに南極マクマード地域、ドライバレーの湖沼の調査に着手した。それこそ足軽として、併せて研究を補完するような地形や気候の観測者としてこの末尾に加えて頂いた筆者は、テントの中での暗くならない夜中の現地分析や、湖水の水温の異常成層、アザラシミイラの不思議などについて交わした熱い議論を忘れることができない。このドライバレー調査は1987年まで続けられ、鳥居博士はその最後まで現地に赴き、この間アンタークティサイト（ナンキ

ョクセキ）の発見や、日米ニュージーランド国際共同ドライバレー掘削計画など多くの成果を挙げた。これらを通じて博士は外国人研究者と交流を深め、多くの知己を得たのである。この国際共同による調査研究に先鞭をつけられた功績、先見性と行動力は高く評価されることであろう。



ドライバレー・ライト谷のドンファン池で南極石を採集する鳥居さん

極地研究振興会は、ドライバレー調査を契機とし、南極観測の再開を視野に入れて、鳥居博士の尽力により1964年12月茅誠司博士を理事長に迎えて発足した。爾来44年、南極観測52年の大半と歩みを伴にしてきた。1979年永田武博士の命により米南極局を

訪れた際、局長トッド博士らからそれまで彼らが混同していた国立極地研究所と振興会の違いを訊かれ、説明に努めたこともあったのである。創立以来常務理事・事務局長を務めてこられた鳥居博士は、二代目理事長和達清夫博士の後を受け、平成7年1月理事長に就任され、財団の運営に心を砕かれたが、筆者は博士はやはり根っからの研究者としての生涯を過ごされたと思う。去る6月27日、国立極地研究所で、山内教授の懇請により、最後となった講演に臨まれた。広い講堂に多くの聴衆が集まった。筆者も初めて聞く南極観測秘話ともいえる話に交えて、昭和基地で初めて大気中の二酸化炭素ガス連続測定を導入

された博士は、すでに20世紀初頭、二酸化炭素ガスの気温変動との関わりを指摘したスウェーデンの物理化学者 S.A. アレニウスと極地探検家 N.O.G. ノルデンショドの関係を示された。極地探検家であり文献博捜を心掛けた研究者鳥居博士の姿をそこに見た思いであった。

生涯をかけて尽力された日本極地研究振興会の理事長として、現職で逝去されたことは、もって瞑すべしであろう。生前法名「釋鉄照」を受けられた先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌



村山雅美さんを偲ぶ (下)

偉大な極地プロデューサー

大前純一

南緯70度17分、東経43度39分。真っ白な氷の平原に小さな赤い雪上車がいくつか並んで見えた。1988年1月10日午後5時19分、村山雅美隊長率いる日本南極飛行隊のツイン・オッター機は、昭和基地から約170マイルのソ連マラジョージナヤ基地を訪問した帰路、みずほ基地を目指す旅行隊を確認し、すぐそばの氷上に着陸。村山さんは「やっ、やっ」と言いながら、女性南極隊員第1号だった森永由紀さんらを激励していた。

南極の日本基地への飛行機での到達を「人生第2の宿願」（「私の極地遍歴」、1988年雑誌 PAPER）としていた村山さんが企画し、朝日新聞社とテレビ朝日が後援となってスポンサー企業を集め、総額5,000万円以上の遠征費をひねりだして実現したのが、「日本南極飛行隊」だった。

朝日新聞の東京社会部長だった柴田鉄治さんの命で、担当記者となったのが私だった。事件取材が主流の社会部内で、理科系出身で米国 MIT への社内留学から戻ったばかりの私がたまたま適任とされたのだろう。

すでに村山さんによる下交渉はすんでいた

ものの、取りかかってみれば各基地での燃料補給の調整など、まだまだ事務処理が山のようになり、テレックス（まだ、そんな通信システムが新聞社にもあった時代である）やファクシミリで各国政府や基地との文書のやり取りを重ねた。

南極への出発地を目指す経由地チリのサンチャゴで驚いたのは、ホテルで村山さんがテニスラケットを持ち出したことだ。「ま、君たちはゆっくりしてきてくれ」とさっそうと出かけていってしまった。後で聞けば、「燃料のことで、海軍の偉いさんと懇親を深めてきた」とのこと。当時チリは、村山さんがもっとも愛した「自由」からほど遠い、軍政下にあった。村山さんの目的完遂に向けたしたたかな、そして軽やかな対応には脱帽せざるを得なかった。

あすか、そして昭和基地への途上、チリ、英国、ドイツの基地を経由し、帰路にはアルゼンチンの基地にも立ち寄った。その度に、迎え入れる基地のトップから若い隊員にまで、冗談を飛ばし、かつての極地探検の話題をふりまき、談笑の輪を作り上げている村山さんは、ダンディでおしゃれだった。

前出の雑誌 PAPER は高級衣料品会社の季刊誌で、村山さんがモデルとしてジャケットやトレーナーをとっかえひっかえ着せられてあちこちに登場している。南極から戻ったばかりの夏にこの雑誌を見た時にも、また私た

ちもあぜんとした。

その飄々とした村山さんも、南極点にまで政治家を連れて視察に乗り込んで日本政府としての南極観測の枠組みを作り上げ、最晩年はしらせ後継船の建造計画でも80歳という年齢を感じさせないダイナミックな仕事をされた。

南極倶楽部の発足時の「温故知新」の文章には、日本の観測態勢は「旧態依然」と喝破し、「複数の船と航空機によるアクセス増強」を訴えておられる。

その航空作戦の口火を切ったのが、「日本南極飛行隊」であったと思う。

自らの報告である「南極飛びある記」(極地47号、日本極地研究振興会)を読み返してみても、その燃料消費量、各基地での入手価格まできわめて精緻な記録を残しておられるのに驚く。このデータをもとに、航空機を2

機借り上げ3ヶ月間南極で運用すれば5,000円余で、観測と輸送に大きく貢献できると提案されている。

国を動かして新しい枠組みを作るには、燃料のドラム缶1本当当たりの価格を現場で全部抑えて、そのためには軍人ともテニスで付き合ってくるという、長期的なビジョンと微細構造へのこだわりを持ち備えた村山さんは、地球を舞台にものごとを組み立てる壮大な極地プロデューサーであったと思う。

「村山企画」の中で、数少ない未達成項目となっている、航空機による南極基地への輸送態勢の確立は、いつ実現するのだろうか。

(元朝日新聞社記者、1987-88年、昭和基地への空路開拓飛行取材)



写真説明：昭和基地への空路開拓飛行の中で、みずほ基地への旅行隊を空から訪問した際の村山さん(中央)。左隣は日本初の女性南極観測隊員となった森永由紀さん(1988年1月10日)



連載 支部便り④ (秋田支部)

「秋田OB会支部の結成の由結構なことです。」“92.11.9.”と消印のある村山雅美先生から届いた一通に記されています。お連れした白神山地、鶴の湯温泉、そして三途川溪谷などの情景を思い浮かべながら綴ります。村山先生は1987年頃から白瀬南極探検隊記念館の創設に尽力され、秋田の二人も参加した27次隊のオブザーバーとして「しらせ」に乗船されたご縁で、金浦に来られる度に夜を徹して飲み、南極観測草創期からの興味あるお話をうかがったものでした。



村山さんと鶴の湯温泉にて

秋田県の手製パン会社の専務として赴任さ

れた練木允雄氏（５次夏）から「村山隊長に紹介された」と電話が入り、先ずは秋田大学に勤務する佐藤安弘（２７次・３９次越冬）、加藤隆一（２１次越冬）氏らとの交流（山スキー・登山・飲み会）が始まりました。平成２（１９９０）年に完成した白瀬記念館、設立と同時に名誉館長の座に就かれた村山先生との交流は練木氏や秋田在住の南極ＯＢも加わり活発になりました。そしてその練木氏を支部長として、“勝手に”立ち上げたのが「南極ＯＢ会秋田支部」です。１９９１年９月１０日付けのお便りには「練木君のサハリンの旅は愉しく読みました。一度皆さんと一杯と願っています。春はフロンティアスピリット号で南極旅行でした。観光船は大したものです」と記されているので、秋田支部の創設はその後です。

秋田支部の佐藤事務局長は有能で、“勝手に”結成後は菊地勝弘先生（９次越冬、当時秋田県立大学教授）、医師として越冬した秋田在住者、秋田地方気象台勤務の南極ＯＢを発掘するなど、１８名の支部会員を擁するまでになりました。船の方々も秋田支部が主催した南極展の会場で声をかけてくださり、「ふじ」の乗員お二人が会員です。また、恐れながら、名誉会員をお願いした秋田に本籍をお持ちの楠宏先生や白瀬記念館の小柳伸光氏（現、にかほ市教育次長）など賛助会員も名前を連ねております。練木初代支部長時代、そして引き継いだ私の代でも秋田支部の会員はとにかく飲みます。新年度、暮れ（或は新年会）そして久松武宏、元「しらせ」艦長など南極ゆかりの方々の来秋歓迎会等々、何かにかこつけて飲みます。昨年の忘年会は「南極探検隊長白瀬轟顕彰会」の方々を含めて総勢３０名余りが賑やかにやりました。



三途の川の記念写真

前段で触れた三途川溪谷探訪は例によって深夜の２時、３時まで飲んでいた席で、インドから帰国されて間もない村山先生に佐藤事務局長が「先生は地球上で行かれない場所は無いのでは？」とつぶやいたところ、「あるぜ！三途の川よ！」と返答されました。先生一流の洒落だったようですが、私が「湯沢市の奥に三途川溪谷という場所があります」と申したところ、先生曰く「次回はそこへ行こう」で実現しました。後日、極点旅行に使われた雪上車が白瀬記念館に寄贈され、極点旅行隊の方々を中心に「ＫＤ６０５を訪ねる会」がバスを仕立てて金浦に来訪されました。その帰途、鳥海山祓川→三途川溪谷→栗駒山荘→一関と旅行隊を先導しました。栗駒山荘での昼食の際、村山先生から「さっき三途川を通ったよな」と言われました。言外の意で、皆さんとバスを降りて歩いて渡りたかったような表情でした。気が利かないガイドであったこと心残りです。



金浦の白瀬記念館に展示されたＫＤ６０５の前で

「南極のふしぎ — 秋田大学から南極大陸へ —」展で、１週間の開催中さすが白瀬中尉のお膝元というべきか、９，７５０名の入場者を見ました。オープニングの特別講演は小島秀康極地研教授（秋田大卒業生）で、期間中、特に土日は秋田市在住の６名と秋田大学生が「南極の旅行・生活」、「南極の空」など５コーナーに立ち、入場者との「Ｑ＆Ａ」に臨みました。大先輩の菊地先生には南極点のものを含む貴重な雪の結晶写真の展示と解説をいただきました。その後、南極観測５０周年記念事業に協賛して開催した「南極のふしぎ２００６」も４日間で５０００名弱の参加者を見、２００７年には秋田大学の大学祭会場

で「南極展」を催しました。2005年、2006年の会場となった秋田市自然科学学習館では来訪者から「南極は今年もやりますか？」という声がたびたび寄せられるようで、ここ2年間はこの学習館に自衛隊秋田地方協力本部から寄贈される南極氷の贈呈式にあわせて「パネル展」や簡単な南極講演を行っています。白瀬南極探検隊の映像は必ず流します。

秋田支部は「白瀬中尉生誕地」としての誇り、晩年の村山先生から、南極の今昔も含め様々な教えを直接いただいたという誇りを胸にこれからも頑張っていこうと思っています。先ずは再来年に迫った「白瀬百年！」南極OB会の皆様、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

(秋田支部支部長 井上 正鉄 (27次越冬))



連載「時は巡り」③

タロジロ再会時の疑問 (前編)

北村泰一

(第1次、3次越冬 九州大学名誉教授)

私は第1次越冬隊(1957)では犬係りであった。第2次越冬は失敗(1958)。犬達15頭だけが残された。そして第3次越冬(1959)時、私は再び基地に赴きタロジロの生存確認したという不思議な運命をもつ。第3次夏隊には、同じ第1次越冬の機械係りの大塚正雄氏が参加した。無人で放置した基地の発電機をすぐに動かすというのが役目であった。ヘリコプター1番機で大塚隊員たち数名が飛んだ。そしてその時、黒い犬が2頭生きていることが発見された。名前はわからない。



タロジロとの再会(右から永田隊長、松本船長、村山越冬隊長。1959年1月末)

その時、私は宗谷船上にいて連日連夜の荷

役作業に疲れ果てて自室で仮眠をとっていた。犬生存の知らせはすぐに宗谷に伝えられ、仮眠中の私が起こされた。すぐに基地へゆけ、という。黒い犬はどれも同じに見えて、私以外には見分けることは難しいというのだ。

何年かたって、タロジロとの再会時の状態が問題となった。風評は、生きていた黒い犬たちが大塚氏めがけて走り寄りとびかかってきた。大塚氏もまた犬達を抱きしめたという。以後、世間の風評はそうになっている。だが、大塚氏は亡くなっており、確かめるすべもない。

私が基地に降り立った時、彼等は決して私に向かって走りよってきたのではない。私が近づくと、暫くの間、互いに数メートルの間隔を保って対峙した。呼びかけたり色々な試みをした後、彼等はやっとタロジロと判明した。それまでに10分以上、いやひょっとすると30分近くかかっていたかも知れない。

それから後は、世間に流布されている情景と同じであった。互いに抱擁し、され、私も涙がとまらなかった。("極地26号(第13巻第2号、昭和53年(1978))"、"同文：南極外史(昭和56年(1981))")。拙文"極地26号"は、当時から20年しか経っておらず、その時、私の記憶はなお鮮明であった。

こうして、2頭がタロジロであることが確

認された。が、以来疑問に思っていることがある。その疑問とは、

- ① 2頭の犬はいずれも体重50kg前後の子熊ほどの大きな犬で、加えて黒い長毛のために実際以上に大きく見えていた。
- ② 私が彼等に会った時、体には茶色の毛玉がぶら下がり、また、ポマード様の脂めいたものがあちこちにベタリ付着していた。つまり、彼等の体は汚れていた。
- ③ 私でさえもそんな子熊ほどの、相手が誰だか判らない犬に飛びつかれば、それだけで恐怖心が先にたつ。電話で誰だかわからない相手から、突然挨拶をされてもすぐに返事を返す気になれない。相手が判ったのち、初めて挨拶を交わす気になるアレと同じではないか。
- ④ タロジロは柔和であるが、風連のクマや紋別のクマや深川のモク（いずれも黒）ならどうする？ 彼等は野性的・闘争的で力も強いし喧嘩っばやい。それに、犬たちは放置されて恨んでいるかも知れない。無人の1年間でより野性にかえっているかもしれない、という恐怖感は起こらなかったのであろうか。
- ⑤ 大塚氏の主な役目は、一刻も早く基地の発電機をチェックすることである。いか

に犬が生きていたとはいえ役目を放置してそんな犬に構っておられたのであろうか。

結論として、そんな小熊ほどの巨躯の、しかも汚れている2頭の犬たちにとびかかれて、機械係りで余り犬とは馴染みのない大塚氏は平気で彼等を受け止めて実際に抱擁したのであろうか。大塚氏は、犬たちに恨まれているかも知れないという罪悪感、恐怖心は持っていなかったのであろうか。『盲、蛇に怖じず』というアレだろうか。

世間では、例えばアノ有名な映画『南極物語』（1983封切、蔵原惟善監督）でも『タロジロは生きていた』（藤原一生作、菊池徹監修。1959初版）でも、『“本当”の南極犬物語』（綾野まさる著、2006版）その他では、生きていた犬は人間に（私とは限らない）に走りよって来て飛びついてきている。確かにその方がうける。だが、いずれも第3者の記述である。

世間の人は、事実を知らないからみなそう思っている。だから恐ろしい。ウソでも100万回そういっていると『真実』になる。歴史はそうして創られるのかも知れない。だが、ことタロジロに関しては、本当のことだけを歴史に残したい。（つづく）



連載「氷海奮戦」②

私と「宗谷」

三田 安則（1、2、3、4、5次）

昭和30年9月、はるか南の海で台風観測中の私に、「南極観測船『宗谷』乗組員候補を命ず」との予期もしなかった電報とともに、第一管区での耐寒訓練を受けるべき指示電が入った。40度を越す暑さ、100%に近い湿度の南の海では氷の海は想像だけに出来なかった。凍った海を見たこともない者にとっては無理もないことであった。

年が明け1月。釧路海上保安部の巡視船「と

かち」（当時唯一の耐氷型）に乗船し、港内の海氷が凍結していく自然の営みに驚き、一面に張り詰めた根室港の氷を、バリバリ、ガリガリ、壮絶な音を立てながら砕氷入港した時の驚きと感激は、今もって忘れられない。

「船というのは、氷を割って走るもの。氷を割って走れないものは、船ではない」。後にソ連（当時）のオビ号の航海士から言われた言葉が、はっきりと思い出される。生ま

れも、育ちも、生活も、氷との闘いである彼らにとっては、氷を割って走るのは当たり前のことであろうが、北の一部で僅かな期間、海が氷結状態になる日本では、南極の海はおよそ考えられない難関に思えた。



宗谷の古希祭でのお元気な三田さん

「宗谷」の第1次準備、艤装時の苦勞。船底真水タンクの整備。身動きも取れない隔壁内、酷暑、セメントと錆と汗にまみれての、まさに死ぬような思いの作業であった。水に不自由なことが出来るだけないように、一滴でも多くの真水を搭載できるようにという作業であった。「水」、これが一番心配であった。しかし神の配慮か、極地では水に恵まれ、心配の種も小さくなり、助かった。

ビルジキール（横揺れ減殺のため船底に付けてある板）の無い船。私は十数隻の艦船に乗ったが、ビルジキールの無い船に乗ったのは、「宗谷」が初めてであった。乗組員のほとんども同様であった。

船は浮きもの、揺れるもの。普通の構造の船でも「うねり、波、風」で揺れるのが普通というより当たり前の動きだ。まして太平洋、南支那海、インド洋、大西洋、暴風圏、南極海と、世界の荒海を乗り越えての大航海。そ

の船にビルジキールが付いていなかった。

次に心配なのが固縛の問題だった。予め説明はしてあったが、贈られた盆栽、花束、山盛りの花瓶等々が、卓上やベッドに悠然と飾られての船出であった。しかし外洋に出る間もあらばこそ、一発で飛んで壊れ、床に落下して粉々になる出来事が起きた。初めて船の揺れの凄まじさに驚き、恐怖と無念さを味わった隊員が多かったと思う。

シンガポールを出港しケープタウンまで、赤道直下のインド洋を斜めに当時は23日間。今では考えられない冷房なしの航海だった。からふと犬たちには、冷房付きの犬小屋があったが、隊員、乗組員は、赤道祭等で憂さ晴らしはしたものの、じっと我慢の航海であった。懐かしい思い出なんてものではない、苦しく辛い我慢の日々であった。

時間、経費その他いろいろな事情はあったと思うが、情緒に溢れた「宗谷」時代が懐かしく思い出される。

一本、二本と切れていく見送りのテープに、名残を惜しむ出港、総員起こし、体操、甲板掃除（犬の処理）、宗谷大学、映画会、ダンス教室等々、隊員・乗組員は一体となって嵐を越え、氷と闘い、南極へ向かった。一次、二次ではオングル街道の雪上車輸送。文字通り命をかけての行動でも隊・宗谷の一体感は崩れなかった。

揺れる「宗谷」、暑い「宗谷」も最後までよく頑張ってくれた。「不可能を可能にした奇跡の船」と賞賛され、「日本の昭和史」とも賞賛される「宗谷」。元乗組員、隊員、船の科学館職員、そして多くの見学者の優しい眼差しに包まれ、今静かにお台場の「船の科学館」に繋留され、余生を送っている。2月16日、「宗谷」は、「古希」を迎えた。日本人の喜びと悲しみが秘められた「宗谷」、いつまでもいつまでも幸せに！栄光あれ「宗谷」。

「宗谷」への思い出は尽きない。

私と南極の空

渡辺 清規（3，4，5，6次宗谷飛行士）

南極観測で最も強く印象に残っているのは、初めて参加した第3次観測である。

第2次の越冬隊成立に失敗したことにより、

第3次からは輸送方法をヘリコプターによる空輸を主力にすることになった。このため南極観測船「宗谷」をヘリ空母に改装して後部

に大きな飛行甲板を設け、大型ヘリ2機を新たに搭載した。

昭和33年11月12日、「宗谷」は盛大な見送りを受けて、東京港を出港した。

出港までの日々は忙しかった。新たに輸送の大任を担う2機の大型ヘリコプターを受け取ったのが10月15日、「宗谷」に積み込んだのが同月25日と11月1日、まさに押っ取り刀での南極行きだった。

翌34年1月14日、日本の南極地域輸送の歴史に新しい1頁を加えようという空輸開始の日のことであつた。



大型ヘリによる空輸に切り替えた第3次隊の第一便発進。渡辺さん操縦。(1959,1,14 深瀬撮影)

私は第1便として202号機に搭乗した。201号機と同時に発進するため、「宗谷」が接舷している氷盤上に移動して、201号機が飛行甲板上で出発準備を終えるのを待つことになり、「宗谷」を離船、氷盤上に降りた。

氷の硬さは大丈夫かなと、機体を揺らしたその瞬間、ガクンと右前方に傾いた。とっさにピッチレバーを一杯引き上げると、機は轟音を発して空中高く跳躍、危うく横転を免れた。冷や汗三斗の思いであつた。

機内には、1年間無人だった昭和基地を一刻も早く再開すべく、村山越冬隊長、武藤、大塚、清野、荒金、芳野の各隊員が搭乗し、快晴の空を南下する。無限に広がる白皚々の大氷原、この下が3千メートルの海とはとても想像できない。

やがて基地に着くと、1年間無人の基地で奇跡的に生存していたタロ、ジロとの出会いだった。忘れ得ない思い出である。

その後、天候は安定せず、私は16日から10日間、基地に留め置かれることとなった。この滞在中は、観測隊員の世俗を超越したような雰囲気に触れ、永田隊長の手料理も味わ

った。また、寝場所に北村隊員の部屋が提供されるなどの厚遇を受けた。

21日の深夜、風の音で目が覚め、201号機のところに行く。機は既に荒天に備えて風当たりの少ない場所にハーケンを打って地上に固定しておいたが、ローターが唸りを上げて大きく揺れていた。機内に入ると、機体は絶えず振動し、操縦桿がローターの揺れをフィードバックして動いている。

それを固定して様子を見てみると、村山隊長が「大丈夫か」と言って入ってきた。「大丈夫」と答えたのだが、彼はしばらく留まり、やがて安心した様子で帰って行った。

外に出てみると、小石や砂や氷の礫が飛んできて、顔を上げることができないばかりか、体が飛ばされそうになる。観測記録によれば、東北東の風28メートルとなっていた。

荒天は翌日夜になっても止まず、機内に泊まることにしていると、平山隊員と一緒に泊まってくれろと言う。有り難かった。

26日、やっと10日ぶりに空輸再開となった。「宗谷」に戻った私が第15便として出発する頃には、付近の視界は200メートルほどに悪化していた。直前に帰船した機長の「視界が悪いのはこの辺だけ」という報告を頼りに出発、10分も行けば好天するだろうと気楽に考えて南下を続けた。だが、一向に好転しない。30分、40分と経過しても良くなならない。むしろ悪化して、50メートル先も怪しくなってきた。危険を感じて、速力を45ノットまでに落とす。高度計は、50フィートを切り、正確な高度は判らない。

前後左右上下、ただ真っ白の世界で、上下の識別は、勘に頼っていると言ってもよく、空間識失調の戦いだった。苦闘すること50分、無事生還することができた。

南極観測のことは、50年経っても昨日のここのように思い出される。3次から6次まで、4回にわたる私の南極観測参加を通じて、圧倒され、また感動したことは、大自然の営みの壮大さと神秘的な美しさだった。

一夜にして「宗谷」を閉じ込め、時が来れば解き放ってくれた流水の海。凄まじかった昭和基地のブリザード。夜半に見た原色の悪魔の如き雲の動き。斜陽を浴びて金色に輝く氷山の群れ。大空を乱舞するオーロラ等々、50年経っても忘れ得ぬ南極である。



連載「昭和基地はいま」②

ノルウェイ・米国合同トラバースでの経験

武藤淳公(第46次隊夏 コロラド大学大学院)

2007年から2008年の南極の夏季、スウェーデン・日本の合同トラバースが注目を浴びていたようだが、同じIPY、TASTE - IDEA(詳細は前号、4~5ページを参照)傘下で、ノルウェイ・米国の合同トラバースも同時に進行していた。このトラバースは、トロール基地・アムンゼン・スコット南極点基地間を、2回の夏季で往復するという計画で、私は往路に米国側の一員として参加させてもらい、博士論文を書くための観測を行った。トラバース中の出来事のみならず米国、ノルウェイの南極観測体制など書き記したいことはたくさんあるが、本稿では日本の南極観測と関わりがあることに絞って紹介させていただく。

我々のルートは、トロール基地を出発し、プラトー基地、到達不能極を経由して極点基地に向かうというもの。当然のことながら、プラトー基地、到達不能極という、歴史に名を刻んだ2地点の訪問は、科学的な成果とは別にして、今回のトラバースのハイライトといえる。プラトー基地には、日本の38、42次隊が訪れているが、今回、1969年の閉鎖以降初めて、基地内に潜入してきた(出発前にNSF(米国科学財団)に許可を取ったうえで)。建物が一番高いところが辛うじて雪面上に出ており、緊急脱出口と思われる部分から梯子を下ろして基地内に下りた。内部の様子は、あたかも1週間ほど前まで人が生活していたかのようで、ダイニングテーブルには吸殻が残った灰皿があり、医務室の棚には医療器具が整然と並べられていた。期待を裏切らず、プレイボーイのピンアップポスターも…。

とりわけ私の目を引いたのは、日本語が書かれた青い筒状の缶である。側面には'Peace'、ふたには、'日本専売公社'の文字。1980年生まれの自分にとっては聞き慣れない社名であったが、これが現在のJT(日本たばこ産

業)であることはすぐに想像がついた。後日、日本へ帰国した際に、極地研の藤井所長にこの話をしたとき、これは'ピー缶'と呼ばれ、ある世代の方々にはおなじみの品であることを知った。このピー缶はもちろん、9次の極点旅行隊、或いは8次のデポ隊が残っていたのであろう。非常に残念なことに、基地内が極低温であったため(約-52℃)、ピー缶を発見した頃にはほとんどのカメラが使用不能な状態になっており、撮影することができなかった。とにかく、この地球上の最僻地の外国の基地において、こうして日本語を目にすることができたのは、なんとも嬉しいことである。



プラトー基地に潜入(2007年12月22日)

プラトー基地では、ピー缶を手にして40年前のことに思いを馳せる程度であったが、トラバースを終えたときには、9次の極点旅行がどれだけすごいことだったのかを痛感し、隊員をはじめ関わったすべての方々の苦勞、努力に深い敬意を抱くことになった。というのも、我々は極点基地へ到達することができなかったのである。4台中2台の雪上車の故障のため、極点基地手前、約350km地点で止まることを余儀なくされ、人員、採取したサンプルと最低限の観測機器を飛行機で極点まで運び、他すべてはその地点で次のシー

ズンのために越冬させている。雪上車の故障は、設計とは見合わない量の重量を牽引させたことによるディファレンシャルギアとトランスファーボックスの破損で、車の設計と燃料デポ計画に誤算があったといえる(ただし、観測項目はすべて達成していることは、明記しておきたい)。



南極点にて(2008年1月22日)

9次隊の極点旅行は、1シーズンで昭和-極

点の往復5280kmを走破していて、自分の知る限り、これは未だに南極における旅行の最長記録である。南極観測を始めて10年余りのうちに、あの苛酷な環境に耐えうる雪上車を開発し、前例のない距離をカバーする計画を成功させるには、相当な熱意のもとに議論や試行錯誤が重ねられたことが想像される。40年前に5280kmを走ることができたならば、最新型の雪上車と衛星画像、GPSを駆使して2500kmを走るのはさほど難しいことだとは思っていなかった(もっともこれは、設営面にはほぼ関わっていなかった自分の考えではあるが)。

コロラド大学大学院9次隊の極点旅行の成果は、その後のドームふじでの深層掘削計画へとつながり、現在の日本隊の内陸オペレーションのノウハウは、世界の1、2を争うものであるだろう。当初のゴールである南極点に雪上車で到達できなかったことは少々残念ではあるが、このような経験により、南極点に立つ日の丸を見たときの喜び、日本人としての誇りをより一層噛締められたことは、間違いない。

追伸:ノルウェイ・米国合同トラバースプロジェクトのウェブサイトがあるので、興味がある方は是非ご参照のほどを(<http://traverse.npolar.no/>)。



受賞

中村 強(4次夏:超高層部門)
瑞宝小綬賞を受章(内容:教育研究功労)
平成19年11月3日生存者叙勲
木更津工業高等専門学校名誉教授

訃報

三枝隆次 1月 5次越冬 気象
重松達雄 6月 宗谷1、2 機関

富田徹郎 7月 7日 6次夏隊 食料
安田 弘 7月22日 12次越冬 医療
吉川虎雄 8月19日 1次夏、6次夏隊長
飯塚昭二 10月10日 ふじ12次 海自
浅尾深八郎 10月14日 宗谷6次 機関
鳥居鉄也 10月16日 1、2次夏
4次副隊長、8次越冬隊長



* * * 広報委員会からのお知らせ * * *

鳥居鉄也さんが、10月16日お亡くなりになりました。謹んでご冥福を祈ります。20日夜お通夜、21日朝告別式が東京・杉並区の堀ノ内斎場で行われ、たくさんの南極関係者が参列、生涯を南極関連の仕事に打ち込まれた鳥居さんの遺徳を偲びました。

鳥居先生死去の報告と、葬儀委員長を勤めた吉田栄夫さんの追悼記を、既にできていた会報5号の骨組みを急遽変更して、新たに取り入れました。このため連載物など執筆をお願いした方たちの原稿を、次号以降に繰り延べざるを得なくなりました。事情を汲んでいただき、不手際をお許しください。

南極OB会報の創刊号は、昨年10月15日付です。それから1年ちょっとで5号まで来ました。発送が終わると間もなく次号の組み立てと、かなり慌しい1年だったような気がします。情報や動向、読み物など会員の皆様に役立ち、かつ楽しいものにしたいと願っておりますが、まだまだの感しきりです。その上ミスがかなりありました。よりよいものに努力するつもりですので、ご支援のほど宜しくお願いします。



10月末から11月初め頃の昭和基地風景

南極OB会事務局

所在地 〒101-0061

東京都千代田区西神田2-3-2 牧ビル301

電話&Fax : 03-5210-2252

E-Mail Address : nankyoku-ob@mbp.nifty.com

南極OB会ホームページ : <http://www.jare.org/>
